

## 2017 年度「研究者の横顔」 武者 篤先生

### 1. 研究者になろうとしたきっかけ

研究者となって、新しいことを世界に発信できれば、直接担当しなくとも、世界のどこかでがん治療に生かされる可能性があります。目の前の患者さんだけでなく、世界中の患者さんへの可能性を秘めていると考え、研究者の道を選択しました。

### 2. 助成研究の内容紹介

頭頸部がんの放射線治療は、「副作用として口内炎やのどの炎症がでて仕方がない」という認識が強い現状があります。実際、口やのどの粘膜にがんが近ければ、副作用として口内炎やのどの炎症は高い頻度で発症します。放射線の当たる場所や強さを詳しく調べることができれば、副作用の程度や時期などを予測できる可能性があります。本研究では、副作用を予測することでがん治療の副作用に対する不安を和らげ、苦痛を少なくすることを目的としています。

### 3. 2の将来に繋がる結果予想

この研究によって、放射線治療による口内炎やのどの炎症の発症機序を解明することにつながると考えています。予測できることで炎症の範囲を示すモデルの作成や予防方法の開発、症状の緩和方法、看護ケア等にも応用できると考えています。様々な施設でも検討し、日本発の技術として世界的に発信することも目標です。

### 4. 全国の RFLJ 関係者に一言

貴重な研究費をありがとうございます。研究成果を少しでも早く社会に還元できるように邁進していきます。本研究により、世界中のがん治療患者さんの QOL 向上に寄与できれば幸いです。